



## 就職活動に悩むあなたへー氷河期世代からのヒント



コロナ禍の影響で第二就職氷河期が懸念される現在、先の見えない就職活動に苦しむ若者たちの新たな人生に役立つことを願い「就職氷河期世代(※1)」に若者であった時代の学生たちの苦悩と戸惑いを著した図書を紹介します。



[800-1]

就職がこわい

2004年 講談社

香山 リカ (著)

### 著者紹介

精神科医、大学教授、臨床心理士、評論家、エッセイスト。

臨床経験を生かして、現代人の心の問題を中心にメディアで情報を発信するなど、幅広く活躍。

現在は「北海道むかわ町」で診療所副所長として過疎地の医療にも貢献。多数の著書がある。

1991年、バブルは崩壊し、日本経済は長期にわたり停滞した。その間、経済の悪化による就職難が若者たちに与えた影響は大きかった。

就職氷河期と呼ばれる1993年から2005年は、大学を卒業しても仕事を持たない「無業者」が増えた時代でもあった。将来の夢を描き切れず、自分の未来を想像することができなくなった学生たちは就職活動に対する積極性を持たず、就職活動そのものや、就職活動を取り巻く環境からも遠ざかっていくようになっていた。

2004年、精神科医で大学教授でもある著者が「若者たちに起きている現実」を調査して発行した本書には、不況のあおりによる雇用の悪化と、それだけでは捉えきれない「就職しない学生の心の動き」が丁寧に記されている。「いったい、学生たちに何が起こっていたのか」、その根源は何であったのか。就職試験の結果が得られず、今も苦しんでいる若者たちに伝えたい。就職氷河期世代と呼ばれる彼らの当時の活動状況を知り、自分の現実と向き合ってみよう。そしてその後、ゆっくり心に取り入れていこう。「あなたの人生は決して捨てたものではない。きっとたいじょうぶだ。」

有効求人倍率が「1」を割っていた当時は、就職試験を恐怖と捉える学生が多くなっていった。川原調に進んでいるはずの就職試験が、不合格通知によって突然打ち切られる現実。来る日も来る日もその現実に向き合わなければならなかった彼らは、自分自身の存在が拒絶されたような絶望感に陥ってしまい、就職に関する適正試験さえ受けなくなってしまった。

また、男性面接官のジェンダー差別や、嫌がらせに近いと感じる面接を経験した女子学生は、社会で実力を発揮するための入口にたどり着くことができなくなってしまった。「自分なんか選ばれる訳がない」という思いと喪失感が就職活動時期の学生の心に積み重なっていく。その一方で、もはや動けなくなるくらい、自信を喪失しているにもかかわらず、彼らは「どこかに特別な、自分にしかできないことがあるはず」という特権意識を捨てきれずにいた。やがて生きるための就職を考える意識から遠ざかり、先の自分がわからないまま「オンリーワンのな梦想」を持ち「いつか来るはずの機会」を待つようになってしまった。

結果、卒業しても仕事を持たない「無業者」が増え、フリーターや非正規の雇用形態で働き続ける若者が増えていった。

本書発行時の時代背景から20年近い歳月が経過し、その頃の若者たちは中高年代となった。社会環境が大きく変化し、仕事に対する若者たちの意識も多様化したが、コロナ禍の影響で内定を取り消されるなど、就職に関する問題はいまだ解消されず、学生たちは不安や戸惑いの中にいる。「自分が本当にやりたい仕事はこれだ」という、仕事に出合ったとしても、その仕事に就くことが困難であることが多い。その時は、くじけずに、人生をトータルで考えてみよう。自己実現を仕事だけで完結する必要はない。まずは社会に出て、一人で生きていく力を蓄えることから始めよう。実際に働くことで「働く楽しさ」を知ることにつながる場合もある。未来に向かって、一歩踏み出そう。(ぽっと)

(※1) 就職氷河期世代とは、1990年代～2000年代、雇用環境が厳しい時期に就職活動を行い、現在も非正規雇用問題や低賃金など、さまざま課題に直面しているロスジェネレーションと呼ばれる年代。現在厚生労働省はこの年代に対してハローワーク、地域若者サポートステーション、引きこもり地域支援センター、自立相談支援機関等の地域基盤を活用して「働き出す力」を引き出し職場が定着するまで、全面的にバックアップする就職支援を行っている。

男女共同参画センター図書コーナーには、一人一人の生き方を応援する多くの資料がそろっています。  
気軽に立ち寄って書棚をのぞいてみませんか。たくさんの本たちが、みなさんをお待ちしています。